

小學品行論

大日本教育會館  
 第四室  
 第五架  
 第二册

東  
斤  
一

館  
函  
架  
號

東書書

小學品行論中篇

秋月後學

吉田利行

編述

第七章 立志

人の人たゞんと欲するをのハ先づ其志を立る  
 を以て第一起程となすべし蓋し志を品行  
 を運動進歩せしむるの原動力にして品行と志を  
 前衛と達せしむるの器械なり茲は一つの蒸氣  
 車ありんば其動力を加へば一時は十里を進  
 行せしむる器械を具はりても動力の作  
 用を加へざれば唯は頑重なる一物に止まり其

製造は多額の金を消費せし迄して何の用も立  
つへらるる

人たる者の四肢五官を具ふるを猶この蒸氣器  
械の如し若し其氣力を加へざして運動の作用  
を欲わば五尺の軀殼ハ米を喰ふ器械たるを過  
まきしものゝ其器械を活動して世の用物たらし  
むるハ一は志の働まざることをあれハ人たる  
者ハ幼時よりして先づこの立志の二字を領會  
し其方向を定め盡し志一をひ定まれ四肢五  
官皆其命を聽き其進歩を幫助して向ふ所は違

せしむるハ猶彼の器械の氣力は於けるは異か  
らる

さて志を立てるといふを如何あるかとぞと尋ぬ  
るは善を擇び惡を去り正理に従ひ邪曲を避け  
人の人たる道を踐み其畢生の安寧幸福を求む  
るは外あり其志を立てる始めを例へば某の地  
へ往くとあるか如き當下は一步を踏出しな  
ば早晚必を達せし若し其志ありんばハ其  
身ハ始終我門内に止まりて一步も進むことあ  
らへらるる故に曰く志を品行の本

尾張國に二人の貧民あり其名を嘉助三吉と呼びけるが如何にもして一たびを婢僕をも召使ふ程の身とあらんと互ひに志を合せて東京に出で初めの程をさす方より手代奉公をなしたりける固より前途に深き望みある者なれハ數年



の間志を變せしむと考實に勤めし故其主人より資金を與へ何れも一家を立せせけりまだ年少き程なれば兩人共妻を持ちしもさしたる事あり過せる内一日嘉助ハ三吉の許に往き互ひに志を合せたる中なれば其住所のよしありより暮し方の事までも隈なく語り合ひける内三吉の云ふやうハ家を有つ覺悟といふハ奢を戒むるを第一と思ふが故に先頃よりして妻をもとめて吾身も一生生涯を着まゝし心もて見らるゝ通りなるとて

も木綿の衣服を着たるありと語るを聞き嘉  
 助ハ成程尤の事あり吾も暮し方の事ハ付け  
 てハきまふ心を盡せともそれ迄ハ覺悟  
 せさりしとて家ヲ歸り卧したる儘三日の間  
 起き出でざりし。忽ち妻を呼び立てし絹の  
 衣服を疾く用意せよ吾とあふより一生涯絹  
 の外を身ヲ着けしと覺悟せりと云ひし。夫  
 夫より二人の者共を一層の勉強を加へ互ひ  
 劣らぬ身上とあり數多の婢僕を召使ひ其  
 家ヲてたゞ榮えけり

第八章 良心

人既志を立たる上を其由るを道と問ハ  
 るはうを其由るは道と云ふハ茫々たる天  
 地の間古一へ今のかたき唯二つあるの  
 曰く善曰く惡  
 其行ひ正直にして理ヲ従ふを善と云ひ其行ひ  
 邪曲にして理ヲ悖ふを惡と云ふ其善あるもの  
 を擇んでこれヲ就き其惡あるものを見てこれ  
 を去るこれを人の道と云ふ而して其善惡を分  
 別するものを良心とハ云ふあり

此の良心ある者を生と共し生をるものあり共  
 人のおさあき時と在てを知覺未だ開けたして  
 事物の道理を明らるる故に其善惡を分別する  
 力不足し故内は在てを父母の教諭を随ひ外  
 は出てを師傅の訓誨を守り即ち書を讀み業を  
 修め漸次其智を開發して自わらぬれば分別  
 するの地位に進まざるべし故にこれを人の道  
 行と云ふ

既におのれの知覺を多く粗善惡を分別する地  
 位に進まざる其今日を為し行ふ所を以て自己の

良心を問ふべきなり自己の良心を能く其是非  
 を判決して必を自わら欺らばその心煩悶とし  
 て内は自ら羞縮を抱き或は父母の怒りを懼  
 れ或は師傅の訓誨を憚る等のありは是そ  
 の惡をおせし罰責あり其心安泰にして内は自  
 わら快適を覺へ人に向つて耻るべしとあるは天  
 對して畏るべしとあるは是即ち善をおせし賞  
 酬あるなり

さりあるら善をおせしハ賞を迎へんを為めハ  
 何れ惡をおせしハ罰を避るんを為めハ

何れ唯人たるの道を盡して自わら心も慚り  
 らんよとを求むるのよ抑も汝が一片の良心を  
 昭々乎として常々汝の方寸を照らし汝の行事  
 を監督するものふれを内々誠あれを必を外々  
 あらざるを汝知らるる汝の爲る所の善惡を既  
 まどくよとて十目十手の視指する所あるを  
 後漢の揚震と云ふ人東萊郡の太守とあり任  
 所より赴く途中より昌邑と云ふ所を過るより  
 この地の令王密を曾て震が薦擧せし人あり  
 故其徳を報せんとして金十斤を懐中し竊り震

よ贈せざるを震ハ固くこ  
 れをいひみ吾を君を知  
 りたるよ君の吾を知ら  
 ざるを何如あるよとそ  
 と云ひ乃ち密を尚ホ  
 お返し今おれを受けら  
 るよとも素より夜中の  
 事とあり世よ知る人  
 をあらしむるを枉めて  
 受納ありたりと強ひけ



るも震す。答へてまハソと云れども天も知  
るべし地も知るべく我も知り君も知れりい  
うで知るものよしとせんとして遂にそれを納  
れざりしを

又西國に一童子の善く教育せられし者あり  
ある人この童子に向ひ嚮ふこの所は一人の  
見ざる者ありしを時何故に彼の梨子を取り  
て交袋にハ藏さざらんと言ひしを童子答  
へてされをありしをまた一人の在りし  
なり即ち我自うしをを見るものありしか

り我れ自から吾身の忠實あらざるを為  
をを見るは忍びせと云ひしハ前の揚震ら  
用意とひとしく自己の良心を欺くは同一  
佳話と稱をべし

### 第九章 習慣

人既に自己の良心に基きて其善惡を分別せば  
必だ先づ惡しき癖を去て善き習慣を養ふる必  
ずぞ益し人の天性を概ね相近きものにして  
大なる選庭あるはあはざる形を製造家の子  
ハ生れぬは非常の巧思あるはあはざる筈



夫水手の児を始めよりして波濤を怖れ以て泅泳  
を善くする資性ありしもの何れに而して其成長  
は及んでハ必だ其家業を継ぎ其技能の他は異  
ある所以の之のハ蓋し其習慣の然らしむるに  
れ居多ありと云

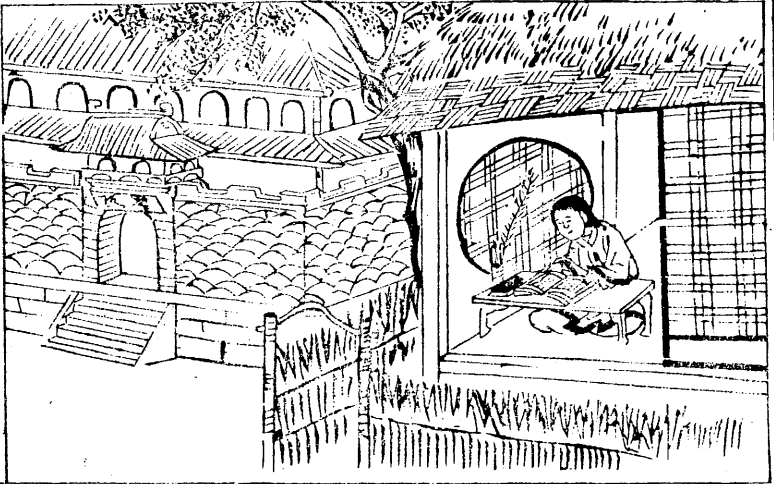
故に以太利の或る理學者ハ凡そ人ハ誰よても  
詩人と有り辯士とあり歎しと云ひ英國有名の  
画家レイノルヅハ人皆画を學んで成就するこ  
とを得べく亦雕像家とありありとを得べくと云  
へる

獨り才能術藝の事のみならず其徳性品行上  
於ても亦然り故に孟子ハ性善を説き人皆以て  
堯舜たるべしと云ひ孔子ハ又性相近し習相遠  
しと言はせたり

故に人たるもの善悪は習慣を長それをおのけ  
ら善良なるもの習を調治し出をべく不良の習は  
は浸染されハ亦おのけりし不良の性を醸成を  
へし墨子が素絲を見て其の黄きをへく黒きを  
染むるを悲しむ揚子が路岐を臨み其北をへく南  
を魚をを歎きしもの亦おの意は外あらは

且夫れ少年の時、於て一をび習慣とあること  
 とハ終身繼續して變化し難きもの多し古人も  
 大木を木の皮に文字を刻むに譬へたり其木の  
 長を多し隨ひて文字も共し大いなるか如く  
 既に習慣の容づくをあらたむるの成其長大  
 の後、於て除き去らんと欲するハ容易のこと  
 一ハ何れも移る故に古く希獵の笛を善く  
 する某氏ハ其弟子の中、於て始め拙き師に就  
 て學び來りし輩ら、ハ一倍の謝金を出さしめ  
 しと云ふ

孟子のいとけあうとし  
 時其家墓に近うまゝ  
 ば孟子ハ常に築禮のま  
 まをあしむ遊び多し其  
 母これハ心つき斯る處  
 ハ子を育つべき場所か  
 らと夫より市街の邊  
 へ移りし孟子ハ又  
 商賣の真似をあしむ遊  
 び故母を此處ゆ子を



置く處はあつどと又も學校の傍に遷り住之しよ孟子即ち俎豆を設き禮容をあつて道ひしより始めて茲に居を定め其成長の後に至り終ひに間世の大儒とあらせしむるの三遷の教をもて其習慣を改良せしむる基くものと謂はるるべし

第十章 勉強

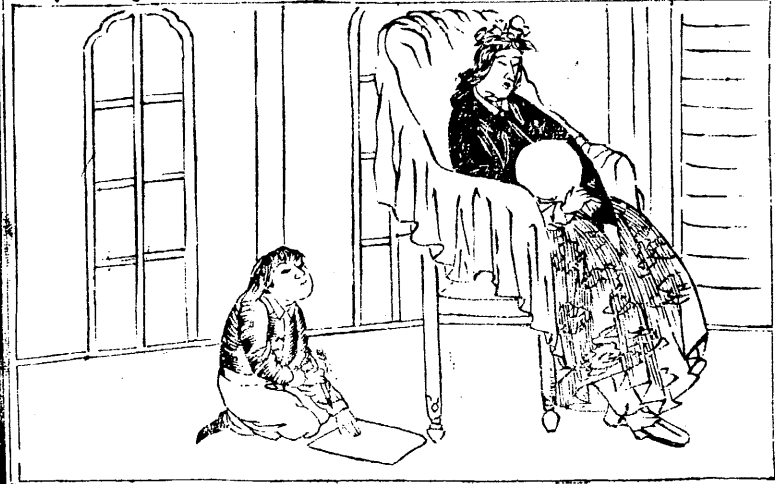
人ハ如何ある才性ある如何ある習慣ありと雖どもこゝに勉強の功を以てせざれば必き完全の地位は達し得へし以て夫れ安卧

して福運に至るを待ち濡手は粟を掴むる如きことハ決して願ふ事あり何れをかり西哲の言に福運ハ常に勤勉ある人の側は傍ありと恰も順風穩波の航海に巧みある者に随ふが如し人の學問を爲すに假令高尚なる學科と雖も凡庸の才質を以て心を用ひ功を積み久しきは耐ふれを必き成就の地位に至る能し假令卓越の才ある人と雖も心を用ゐる功を積み久しきは耐へざれば一事をも成就する能はずと云へるを實に親切ある教戒と謂ふべし

漢の董仲舒も亦事を強勉に在り強勉して學問を成れ、聞見博くして智益明らるるに強勉して道を行へ、徳日よ起りて大に功ありと言へ、且故に人ハ天性卓越ありとも頼むる足らざる才質凡庸ありとも亦自から沮むべし、唯勉強して其業を學ひ忍耐以て成れを永久に持續せられ、習ひ終ひて性とあり始めの程を困難の事たりとも後ハ必だ其容易あるを覺ゆべし、世人ハ又富と力の二つの者を能く理會せんとし、て富を以て力よりも重きものと心得るハ大なる誤りあり、夫勤勉の手ハ鉅萬の財を造り得べし、若し安坐して優逸の光陰を送りあむ假令幾多の富ありとも囊中漸く空乏を告げ、田頭忽ち稂莠を生じ終ひて自から其貧困を招くに至る、故に其天性に倚頼して勉強の功を積まざる者ハ黄金を泥塗に埋め、美玉を草野に投棄するものと謂ふ、其力を怠りて其富の倚頼せんとのハ、あれを窮鬼の隣りに住居せるとの謂つて可あらん

昔し英國に「ウエスト」と云ふ人あり、僅に七歳

の時ありし其の姉の  
 児が揺籃の中を瞻せり  
 顔容の愛をへきを見て  
 急を走りて紙を求め赤  
 黒の墨を以て畫きたり  
 みれよりして畫を作る  
 ことを好み夙に聲譽を  
 得たりしも惜むを天  
 才卓絶せらるのみして學  
 習を積まざりしはバ永



く聲譽を保つことを得たりしと  
 みれよ反して同國愛蘭の辯論家カーランと  
 云ふ者々少年の比ハ明白に言語を道ひ出を  
 ことゆあざるより其郷校に於て吃口と迄  
 も賤稱せられり既にして「カーラン」ハ律  
 法を學び務めて此の性を矯めんと志し乃ち  
 が一日集會の場に於て席より起ち辯論せん  
 と思ひ一時一語をも言ひ出さざること能わを喋  
 黙辯士と嘲罵せられしを「カーラン」に聞て其  
 心を刺さる如く思ふを言語を放ち以みじ

くこれに答へたるこの偶然の事よりして「  
カーラン」益志を奮ひ其學問を勉強し毎日數  
時の間絶好の文章を朗讀し字々明白響亮か  
らしめ或を鏡に對して容貌を整へ動作を學  
び又自から訟案を作してこれを辯論し恰も  
審司は告るゝ如く十分は意を加へしよる後  
遂は有名の辯論家と一世に許せり至り  
たり

第十一章 光陰

光陰ハ造化の元金かり時日と勉強ハ桑葉を細

緞に變せしむ故に古人ハ零細の光陰をも集合  
し終に絶大の功績を顕はせり

さりあり光陰ハ人を棄てし顧みず動もこれ  
ハ人ハ托して其債を負ハしむ今夫れ眼前一時  
を失へバ其失ふとの再び来らば而して其一時  
間ハ為るべき所の功程ハ依然として存留せん  
故に西人「メランクトン」ハ自から失ひたる光  
陰を冊子に記し他日勉強しよるれを償ひたり  
と云ふ

茲に人あを毎日一時間の光陰を無用の事し

浪費を多とせば儆りよ其一時間を得べき所  
の下等の勞銀を以て比例せんも尚一日も貳  
錢を損をへしとれを一月に積むを六拾錢  
即元金六拾圓の利子を失ふをのよして一年  
よてハ七圓二十錢の損とあり此の如く連續  
して二十年の久しきを經過せハ通計百四拾  
四圓を失ふをのよして其元金ハ一千四百四  
拾圓に當るを至

さて此の人か二十年の後に於て其身の貧困  
を憂ふることを阿らんば汝を何故に毎日一時

間の安逸を貪りて其間を得へき所の價直即  
ち一千四百四拾圓の元金を棄てたるやと問  
ふにわれは答ふる辭を何とせんと抑もこ  
を特に極賤ある勞銀を以て其比例を立てた  
るのみ若しわれより以上の人たらんば其  
失ふ所果して幾許を何類を以て推せんまの  
こ

故に古の諺に光陰ハ産業ありとの云へり然れ  
共光陰の資益とつゝハ獨りこれに止まらん人  
をして才徳を修養せしめ其品行を高尚あらし

む人毎日一時の間と雖とも緊要あらざる事を  
息め去りおれを有益の事と用おあを其一年の  
終と及んて多少の效驗を覺ゆへ一更と積むと  
と數年あゝハ平常の資性の人と雖とも必を許  
多の事を成し愚蒙の稟賦の人と雖とも必を化  
して聰明の人とありぬを

おれと反して若しこの貴重の光陰を空開放逸  
の地と抛ちたゞんハ唯其産業と損失を與ふ  
るのこと止まらば所謂妄想の門開けて誘惑  
の鬼入り方寸の田地忽ち變じて惡念の居處と

ありぬへ一泰西人の諺と曰く懶惰あり頭腦を  
魔鬼の工場ありと懼むをる多しや

第十二章 節儉

金錢ハ品行を至人其品行を善くせんと欲せば  
須らく自己の分限を顧みて金錢の用度を節と  
へし衣食住其他よ治づの事は就き自から其私  
欲と勝ち淡薄を以て己を奉る事とハ獨り目  
前生活の計をおのゝありて又後來不虞の窮  
乏を防かんが爲めあり獨り後來の窮乏を防ぐ  
が爲めのこゝありて又吾品行を修養して後來の



善事を保存せんが為めあり  
 さく節儉を行ふは人々勝れたる智識を要するも亦あり又卓絶ある徳を要せし唯は尋常の勢力凡庸ある心才を以て之を成すべし夫れ一厘の銅錢を慎み其出入を簿記し其費用をく其資産を超過せしめざるは家務を經理するに於て最良ある方法とを故に空林登を常記し華盛頓は家事を治むるに其費用毫も常度より踰たる時厳しく之を以て検査せし其亜米

利加合邦の大統領は昇りし時も亦斯くの如くせしと云ふ

然るに世は又節儉の外形を装ひて其自ら私を陋行を掩ふんとするものあり抑も節儉と吝嗇とは其形は似たりとも其實は唯は黑白氷炭のみあり其益し節儉とは己を損して人を益し世の公利を圖らんが為めは一個の私欲を制するを云ふ吝嗇は己れを反し人を損して己の益し獨り身家を樹植し他の痛痒を顧みざるを云ふ斯く相異なるをのちれし其外形の

相似なるを以て世の奢侈を喜ぶ者ハ又節儉の  
人をまじりて鄙吝とかく貧婪と罵る故自わら信  
を多し薄き者と終り其志を墜臨して時俗の浮  
華を逐ふに至るハ豈亦歎をへまの至りあらん

也

宋の陸梭山の制用篇は古くへ周世より毎年  
五穀皆納の上冢宰の官國用を制するの道を  
立て入を量て出をことを為し地の大小と年  
の豊凶を視て三年耕せを必す一年の食を餘  
を法に基づき一家經濟の道を立てたること

あり其大畧を其賤産の何等の種類たるは拘  
らざる凡そ一家一年中より得べき所を概算し其  
内十分の三を貯へ凶荒非常の備へとあり其  
一分を吉凶の需用より充て残六分を以て十二  
月より配當し一月より八分若干一日より八分そ  
幾許を用うべしと豫定し又此の六分の内より  
於て其十七を日用の費より供し其餘三分を衣  
服器用贈答等の事より支辨をれハ其人々の分  
限より應し各用度の多寡を生し富貴の家ハ多  
く用ひて奢とせし貧賤の人ハ少く用ひて吝

とせ及して其生計を永續をを得べきあり  
世換ハ里時移り殊ニ風土の異同ありて今一  
々此の如く為し難き場合ありとせん其標  
準を此ニ立て能く斟酌折衷して一家の産を  
制しおそ所謂奢侈ヲ流るゝと鄙吝ヲ陷る  
患ハあはるゝへし故ニ余を金錢を使用を多  
道ニ於て節儉と謂ハせしめて其無限ニ應ニ其  
當然の道ニ随ふを要しと謂ハんと欲を

第十三章 仁愛

仁愛の心を人の此の世ニ生存を多ニ於て一日

も缺くを多しを多し食料あり若しこの心を放つ  
て顧みざる時ハ其軀殼を活動を多し其生氣を  
既ニ滅絶して人道を距るや甚ニ遠し

故ニ古人ハ天地萬物一體と云ひ又四海兄弟と  
も言へ且況んや其國土を同くし其郷里を同ふ  
し其風俗を齎りし其言語を通し其事業を俱し  
る多人ニ於て互ひニ相親愛し互ひニ相扶持を  
多し情誼を缺くを多し

已ニ欲せざる所ハこれを人ニ施さ勿れ其欲を  
多し所を施して人を愛する猶已を愛する如く

去へー其の相接する際、於て務めて其情を怒  
 察し其過失を寛宥し其不能を容忍をへし其及  
 せざるを責望をへし、以て寧ろ我れは小害を受  
 くとも敢て他人を損を多めと為さへし、以て人  
 と辯論する時は己の説を主張し、他を折服法  
 へし、以て此れを仁愛の作用と云ふ  
 人の窮困を救ひ人の災難を助け人の病苦を恤  
 れ、人の孤獨を賑恵を多め如きを皆仁愛の事  
 なり、其用頗る廣し抑もこの仁愛を施さばハ  
 必く其も賤物は限るべし、如何に窮乏之集

賤の身ありとも人の不幸を見てこれに慰安し  
 人の災厄を見てこれに力を添へ人の憂鬱を洗  
 滌せん、其為めこれは一盞の水を與ふるも苟も  
 其誠心より出たらしむ、天理は協い人道は適  
 し、おのせも亦必く其賞酬を得ることあるべし  
 あり、さるるを、唯も自らの其恩を售り其報を  
 得んとする念頭、その出る時、是所謂る市道  
 の交り、其真の仁愛とハ謂ふべし、以て  
 されを仁愛の心あり、その禽獸蟲魚草木の  
 微といへども無益にこれを傷害をへし、以て

其施を所の順序と云ふハ先づ其親  
 者近き者より厚くして其疎き者遠き者  
 及ぼさへ故に孟子ハ仁の實ハ親  
 事ふる是れありと云ひ又仁者ハ愛せざる  
 ことあり賢を親むを急務と云ふハ云  
 されたり

新瀉縣下須原學校の生徒は酒井伊三郎と云ふ者あり齡いし七歳は満たざる時一日某の家の丁稚軒下の雀巢を窺ひ竿を粘して母雀を獲其足は絲を繫ぎ絲端は石を結び付けてこれを玩弄せし内は不圖その石の脱せ

故雀ハ大いに喜んで  
 雛雀の許へ飛行わんと  
 するを見て丁稚ハ怒ち  
 怒りを發しこれを撲殺  
 さんと志す時伊三郎  
 ハ始終を見て惻隱の心  
 堪へられぬを放たんと  
 してを勸むれとも丁稚  
 ハ總へて聞入れを依て  
 伊三郎は兼て學びし童



蒙教草より古事を引きて論せとも尚聞入  
るべくもあらず故まづ五錢の金をもて  
買取る魚と云ひらるる丁稚へ頼み承諾せ  
し故伊三郎大いに悦び直に其價を與へ雀を  
買取り放ちる里の事後に教負の聞くと  
あり其仁愛あるを感歎し故ら伊三郎を呼  
び其ころ泣を問ひらるる過き頃其母病死  
し悲哀の情已むことあらず今若しこの雀の  
如く我が父無罪に羈をれあはそ悲しむハ  
如何ぞん小鳥と雖とも其情ハ人よかると

か無きことあざんと云ひつゝ涙を流せしを  
其親を思ふ心より推して鳥類に迄及びし  
のもて纒々七歳未滿の人を取りてをいと  
も殊勝の事どもあり

第十四章 謙讓

盈つるを虧て謙だるは益をハ天道あり故に流  
水を隆坻の處に湛へをりて必を卑下の地に趨  
き善名ハ矜高の頭は加らざるを必を遜讓の  
人は聚まる彼の林檎の落るを見て地球の引力  
を發明せし英國の理學家「ニウトン」ハ其時代は

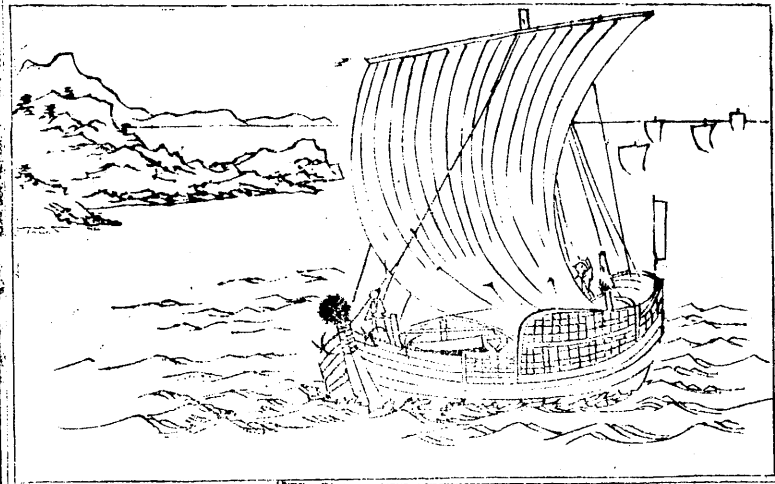
於ても固より雙びあまふ人あれども曾て其才は  
 誇りしこと所々以常より謙遜し如何なる卑  
 賤の者よてもいと懇ろに接遇せし其死せんと  
 ても多ても後生畏るべきの一語を發せしめて  
 其平生を知らるへし

其善は伐らる其勞を施せし已を捨てし人  
 に従ひ人を先として己を後とし其父兄の教訓を  
 重んじ其師友の規戒を守り其言動を慎んで敢  
 て放縱恣肆せずせし其徳を積むる隨て世  
 の稱譽を得幸福其身に聚まりて畢生間の安寧

を受く辱まある若しこの道に反する時を假令  
 其身に才能あり其家富有ありと雖とも一身常  
 に子立して他人の助けを得へし  
 たりありし謙讓も亦節度あり其度を過ぐる  
 甚しき時ハ自わら其卑屈を取り所謂足恭の  
 流とあり君子の取らざる所とをもちこの弊を  
 避けんとありハ唯誠實の二字を以て其言行を  
 貫く登きのみ

昔し筑前の具原益軒上國より帰帆の海上同  
 船の人々其姓名を問ひ聞くとも及を唯何

とあり物語どもをきき  
てつせぐりの日を渡り  
しは其中一人の若き男  
人々を對して經書を講  
を先生ハ唯恭しく黙聽  
しそ一言の是非を由述  
へられさりしお頓て着  
岸の時ハ至り各初めで  
其郷里をあゝ再會を  
契りて別るくは臨み先



生も吾ハ具原久兵衛といふ者ありと名のら  
るゝを聞き彼の若き男ハ大に耻おそれ速に  
逃去しといふ先生平日吾れ人子長したる事  
あし但恭黙道を思ふのこと言ハれしも亦謙  
讓の意ハ外ありけ

第十五章 徳行

信實ハ萬善の骨子にして終りの徳行中こ  
れより重きものハあゝさらあま人假令ひ何等  
の行為あり何等の事業ありともこの信實の骨  
子を抜く時ハ唯其外形の裝飾は止まりて其



仁、仁はあゝゝに其義義は何ゝを故は西哲を言語  
行為の信實ハ品行於て身體の脊骨あるゝ如  
くこれかられを立つこと能ハると言ひ孔子ハ  
人の信實あまをもて大車の輓あゝ小車の輓あ  
まゝ比せられたる

人其外形は顯ハせんと言ふは必を其中  
心より發出せしむるを務むるに斯くの如くは  
して漸次は其習慣をあゝたゝんは終は必  
を内外一致の効果を得世上の人を尊敬され世  
上の人の信用を得其人品人貴くせんことまゝ

他は比類あるへうゝに

西洋品行論は曰く眞實の品行ある人ハ好き聲  
名を得ること其の生成太遅し然れどもその  
眞心の性質ハ全く隠るゝ能ハた蓋し或ハ他人  
は誣毀せらるゝとも或ハ他人を誤解せらるゝ  
とも或ハ一時命運の不幸に逢ひ患難災厄は罹  
るとも忍耐堪受し由りて終は必は他人の崇敬  
を得他人の信賴を得べしその實有の聲價ハ決  
して減ぜを減せざることをありと勉めざるべし  
ん也

古一へ宋の劉忠定公司  
馬温公は謁見して其終  
身踐之行ふへま要道を  
問ハせしは温公誠の一  
字を擧てこれ示せ礼  
た至劉公押返して其の  
先づ手を着くへま所を  
問ハせしは温公答へて  
妄語せざるより始むへ  
しと云ハせしを劉公聞



まて初めハいと易まことと思ハれしが其後  
追々言ふ所と行ふ所を省察點檢せらるゝ及び  
常に相矛盾を多くと多き故一層力を勵ま  
て七年間の工夫を積り始めて内外一致の效  
果を得る礼より事は臨むの際に於て坦然と  
して常に餘裕ありしに至りしと云

小學品行論中篇終

全圖... 卷之... 吉田利行

明治十三年六月三十日版權免許  
同年八月刻成

〔定價十錢〕

著述人 吉田利行

福岡縣士族

福岡縣福岡區湊町  
七拾番地居住

出版人 古賀男夫

福岡縣士族

同縣同區橋口町  
百四十二番地居住

發賣

書肆

東京 同 同 西京 大坂 同 長崎 同 熊本 中津 久留米 同 柳川 佐賀 瀧本 福岡 同

山中市兵衛 稻田源吉 農工甚介 杉本甚介 中島徳兵衛 中野啓造 鶴野四郎 鎌田勤次 長崎次郎 野依曆三 菊竹儀平 赤司平次 開進社 厚生社 佐野長七 林野斧 山崎登

學原脩

小學品行論下

27
3
38